

ビバハウス便り No.102 北星学園余市高等学校創設50周年

2014年11月30日 ビバハウス 責任者 安達 俊子

この11月22日、創設より私が35年間、夫も2年次より9年間勤務した、北星余市高の「開校50周年」の記念式典が盛大に開かれた。

「良くぞこの日を迎えられた！！」これが私たち創設当時よりこの学校に関わった全ての関係者の偽らざる述懐だと思う。北星学園特に伝統のある札幌の女子中高は、北海道では私学の名門校のひとつではあったが、余市に出来た授業料の高い私立校はある意味では、余市町民にとっては招かれざる客であった。

今から50年前、昭和40年（1965年）は戦後の第2次ベビーブームのほぼ終焉期に当たっていた。全国に希望の高校に入れない中学浪人が溢れていた。国立北海道区水産研究所、道立中央水産試験所、北海道勤労者医療協会余市診療所など民主的職場に恵まれていた余市では、婦人、母親運動も活発で、公立高校全入運動、道立余市高校での普通科間口増の運動も盛んだった。

しかしベビーブームの終了を見通した北海道当局はこの要求を拒否した。なんとしても事態の解決を迫られた余市町は、「北星学園大学・高校誘致期成会」を結成し、2万坪の町有地を準備し、町民各層を網羅した運動を展開した。北星学園理事会では、ベビーブーム後の進学者減を見越して、慎重論も強かったが、地域で困窮している事態を放置したままでよいのか、学園の創設の精神であるキリスト教の宣教を札幌市内だけに限ってよいのかとの正論が最後には多数となり、誕生後の困難をあえて覚悟しながら、余市町の誘致に応える事にしたと聞いている。

誕生から難産の余市校の50年の歴史は、まさに苦難の連続だった。北星高校を余市町に誘致するため重要な働きをしてくださった当時の余市キリスト教会牧師の吉岡先生は、ご両親をわざわざ広島県からお呼びして、初代の「北星寮の舎監」をして貰っていた。夫は初代校長の山崎金次郎先生に、下宿の手配をお願いしたら、勝手に北星寮の舎監代理にされたと文句を言っていた。このおじいちゃんに、「この学校はいつまで持つんだろうか？」と夫が言ったら、「しえんしえい、この学校は神様の思召しで建てられた学校だから50年でも100年でも持ちますよ」、とおじいちゃんが広島弁で言ってくれたと最近夫から聞かされた。

しかし近年の生徒減で、年間約7千万円の赤字を北星学園理事会が負担して余市高が存続している。こんなことはいつまでも続くものではない。かつて私たちが現役の時代でも、産炭地を初め多くの私学が毎年のように廃校していた。年毎の北海道私学教職員組合の年次総会でも、「今年も持ったか北星余市！」が合言葉であった。改めて、この学校は絶対につぶしてはならないと決意した。

ったのだ。